

お茶の水地理学会設立の頃

内藤 博夫

昭和56(1981)年の5月(または6月)の教室会議で、教官(先生方)、卒業生、学生の三者を包含する学会を作ることが合意された。その名称はお茶の水地理学会とすることもその会議で決まったのではないかと思う。お茶の水地理学会が正式に発足したのは翌年の5月15日に開催された設立総会においてである。

学会の機関誌はお茶の水地理であるが、学会設立以前にもお茶の水地理という雑誌は存在した。ただし発行主体は学会ではなく、教室であったことが異なる。当時は教室が卒業生と学生の協力を得ながら雑誌を年1回発行していたのである。その内容をみると、基本的には現在のお茶の水地理と同じであるが、現在は消えてしまったものもある。たとえば名簿(新旧教官、非常勤講師、卒業生、在学生の名簿)、談話会報告、学生による巡検報告、専任教官・非常勤講師・卒業生による近況・随筆などである。名簿はお茶の水地理学会会員名簿に引き継がれている。巡検報告と近況・随筆は学会機関誌に変わってからもしばらく続いていたが、巡検報告は巡検一覧という形で示されるようになり、近況・随筆はお茶の水地理学会会報に引き継がれることになった。談話会報告は短報として(新)お茶の水地理に掲載されていたが、これも現在はお茶の水地理学会会報に引き継がれている。この会報は、それぞれの時点での話題・情報を会員に伝えるとともに、会員間の交流の促進に貢献しており、機関誌を補完するものとして重要な役割を果たしているように思う。なお、学会設

立によって再出発することになったお茶の水地理は、その号数を(旧)お茶の水地理から引き継ぎ、第23号(昭和56年3月発行)として発行された。

学会設立以前にも同名の雑誌を発行することができたのは、研究・教育における蓄積があったからである。当時は年に4、5回、教室主催で談話会が開かれていた。この談話会では現在と同様に教官と卒業生が研究成果を発表していた。しかし学会の会報のような情報伝達手段を持たなかったため、その情報は限られた人達にしか伝わらなかったようである。それでも毎回15人前後の受講者がいたように記憶している。

それではなぜ学会組織を作る必要があったのだろうか。このことについては学会の設立に大きな役割を果たされた式正英先生の「お茶の水地理学会の発足にあたって」と題する論稿が参考になる(お茶の水地理 第23号)。これによれば、学術の進歩に貢献するとともに、同窓会の機能を併せ持ち、生涯教育の機会ともなるような組織として学会が必要になったという。このような考え方は教室会議で支持されることとなり、学会設立の方針が決まったのである。退職してから間もなく6年になるが、機関誌と会報を読み、学会の行事に参加することで啓発されることは多い。学会設立時の初心を忘れずに、一層のご発展を祈りたい。

ないとう・ひろお
元本学教授

